

生存科学研究ニュース

VOL. 11, NO. 6

1996. 11. 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518

生存科学研究所専務理事退任ご挨拶 前専務理事 小平 敦

御無沙汰を続けております中に、早くも秋風の吹く季節となりました。皆様お元気にお過ごしのことと存じます。

お知らせが大変遅れて失礼いたしました。私は本年三月の理事会におきまして、設立当初から、そして特にこの三年間の最大の懸案でありました、財団の主目的である生存科学の確立の為の基本構想案を、私の専務理事退任を前提として提案して承認を得、五月の決算の理事会終了をもって正式に退任致しました。

本来ならば、ここで永年のご交誼に厚くお礼を申し上げて、退任のご挨拶を終えるべきものと存じますが、今後財団をやって行かれる方々の為に、この機会にお伝えして置いた方がよいと思われる二、三の事も、ご参考までに重ねて記して、退任のご挨拶に代えさせて頂く事と致します。私事めいた事項も入らざるを得ない事をお許し願います。

思えば昭和三十七年武見先生にお目にかかって、初めて生物生態学に基づいた社会保障とその解析と実践的な実験などと言われて驚いてから、その後も先生の十年毎の思想上

の大きな転換や深化の節目毎に、いつもその学問と社会的実践上の創造の原風景のような生々しい現場の片隅に立会いうる幸運に恵まれて参りました。四十八年からは、世界に向かって打ち出された、未来の科学と哲学としての「生存の理法」について行われた、地球規模での大研究会に。五十八年からは、先生が日医ご退任後の本格的研究会を、公益信託生存科学研究基金化する事に。そして約二年後、葉焼けし、すっかり痩せられた体おして行われた最後の研究会での「不安定の安定」のお話に胸打たれたあと、病床の中の先生を最後まで煩わせましたのは、予定していた信託税制の成立の遅れから、資金上、基金と併行して同一思想と目的の下で、試験研究法人を設立しない限り、基金の運営も不可能となった事でした。単なる財団化については、先生は何十年に亘る無数のご経験から一言で全く反対されましたが、あれだけ私と議論し尽くして造られた信託基金の設立趣意の下での併立が可能ならばとして、懸念されつつも結局ご一任を受けた為、逝去されてから造りました財団と基金との十二年余。これらを通算致しますと、実に三十三年余の武見先生の生存科学を主体とした広く深いご研究と実践から常に目の覚めるような生きた思想

を、直接学び続ける事が出来ました。

この大変な遺志を継がれた茅・熊谷・藤井三先生が直面されたのは、正しく武見先生が危惧されたとおり、両組織を総合する基本構想の研究を欠いたままでスタートし、財団のみが独走した為、国の内外で発生した混乱の中での極めて困難な運営と資金集めの五年間でした。その異様な困難さの先頭に立ち続け通された三先生の本当に頭の下がる日夜のご努力とご指示。又更にこれらの方々をそれぞれのお立場で補佐され続けて下さった、大江・板垣先生を始めとする多くの顧問の方々から常時戴いた、考えられない程のご教導とお励まし。更に幾多の苦境の中で陰に陽に至らぬ私を本当に支え下さった方々。そうした中で様々な事由から、色々な方々に却って大変なご迷惑をおかけし続けた私の失礼さと無力さを思い出しますと、恥ずかしさに一刻もいたたまれない思いで一杯となります。ここに改めて心からの御礼とお詫びを申し上げます。

そうした中で茅先生を引き継がれた熊谷先生は、不退職の決意で両組織の人事を含む再編成と改廃を、基本構想委員会の名で二度に亘り断行され、五年かけて混乱を收拾されました。その二度目のものは最後のご入院の車椅子の中で私に再確認されたのが遺言となりました。先ずこれに従って中尾先生に理事長代行、江橋先生に評議員会議長、板垣先生に顧問から基金の運営委員長をお願いする事となり、三組織一体の総合体として、生存の理法の追及と実践の有機的な棲み分けの体制がやっと出来る事となり、組織上の基礎は出来上がりました。そして更にご遺言通りこれを

生きたものにする為に、一昨年秋、関係官庁からの要請もあって自立した評議員制度への変更を機に組織運営の経費の全体の思い切った削減とともに、三組織の全業務と担当責任者の徹底した見直しと再編を皆で行う為に、中尾先生からこれまでの財団理事会での全研究の総見直しと纏めを板垣先生に二年間のお願いを致しました。来春、これに基づいて、皆さん方がご自身で決める事となります。更に評議員会独自の研究会の創設を江橋先生にお願い致しました。そして本来なら最初から基金において武見記念の表彰や支援の原点を確立する為にも行うべきであった「基金設立の基点である人類の生存の概念に関する研究」を、とりあえず財団で開始しておく事などを定めた基本構想案が、本年三月中尾先生から理事会に提出されました。三年かかりましたが、でもこれで熊谷先生のご遺言の三度目の仕上げの基本構想であり、これを通す為のお手伝いが、私の最後に残された責務と考え、武見・茅・熊谷三先生の墓前にご報告の上、中尾先生に従い私も専務理事退任を決意した上で上程して決定されました。

理事会決定後の、私の退任直前に、関係官庁から一、二の懸案問題と今後の為に、私の在任中の併立両法人の相互の総合的な運営上の基本的な問題点を、その当初からの経緯を含めて今一度明確にしておきたいとの申し入れを受けました。そこで私の説明した事は、武見思想のような全体が有機的に通底的に一本に結合されているものを、行政や税制、更には断片的な学問分類上の都合等から、武見先生が懸念されていたように、不用意に、形式的に分断して併立させた場合、同時にその

基礎目的と思想の同一性と、それを保持する為に不可欠な合意形式の為のシステムとが確保されていない限り、それは棲み分けでなく、分裂に等しいものとなってしまう、当初の基金設立の信託目的に反するものとなること。その為に独特な工夫は当初から行ってはきたものであり、特に熊谷先生の累次の「基本構想委員会」は正にそのものであった事。しかしその本格的な研究や運営は、資金が潤沢時には、多様な展開にかまけて、全く不十分なまま推移し、昨今のような異常金融社会下でギリギリに研究目的を選択する必要が発生して初めて、提出されるものであり、この度財団で正式にこれが決定された事から、我々の両組織は、今後極めて堅固な同一思想上の研究事業の棲み分けを確立しうること。等について、その要点と趣旨を二日に分けて説明し、極めて明快に、そして一切の具体的諸懸案事項を含めて完全な了解と合意に達しました。

そのため退任後の三組織の新任責任者の方々との話し合いから、少しでもこれらを具体的に実現する為の組織の下準備をお手伝いしてからと努力をしてきましたが、これには関係する組織を含めて、皆が今一度武見思想の原点に戻らなければ、不可能なことは言うまでもありません。こうしたことからつい今日まで私の退任のご挨拶も大変遅れて失礼致しました上に、大変長たらしいご挨拶文となってしまいました事をお詫び申し上げます。今後私は、武見思想上どうしても整理しておきたいと考えています一、二の事柄について、基金の資料によって見直しを行ってから、お別れして行きたいと思っております。

す。

今後、皆様のご努力で武見先生の名に恥じない立派な本当の生存科学を確立する基金と財団にさせていただき事を心から祈念致しております。

永い間本当に有難うございました。

平成八年九月末日

小平 敦

第9回「生存科学基礎論」研究会 バイオノミックスについて

平成8年10月24日(木)午後3時半から、生存科学研究所会議室において表記の研究会が開催され、多摩大学教授 鈴木 雪夫氏が「バイオノミックスについて」と題して発表を行い、次いでそれを話題に質疑応答が行われた。要旨は以下の通り。

『バイオノミックス』の著者マイケル・ロスチャイルドは1952年生まれで、ハーバード大学で修士号を取得後、ボストン・コンサルティング勤務を経て、現在アップライト・バイオノミックス社の社長として経営コンサルティング業の傍ら、雑誌への寄稿、講演など多岐にわたる活動を行っている。

今回はこの『バイオノミックス』をテキストとして内容に沿って話を進めていった。本書は第一部「進化と革新」(第1～第7章)、第二部「生物と組織体」(第8～第11章)、第三部「エネルギーと価値」(第12～第14章)、第四部「学習の力」(第15～第18章)、第五部「生存競争と多様性」(第19～第22章)、第六部「フィードバック・ループと自由市場」(第23～第24章)、第七部「寄

生と搾取」(第25～第27章)、第八部「相利共生と協力」(第28～第29章)の八部から成り立っている。

第一部では、生物の進化と人間社会の経済の変化に関する考え方がどのように発展してきたかを示している。ダーウィンが200年前に種の起源を発表、また1953年にジェームス・ワトソンとフランシス・クリックがDNAの構造を明らかにし、進化の考え方が著しく変化し深まったが、近代生物学の進化の考え方を借りれば技術革新とか経済のプロセスがよく理解できるのではないかということ述べている。

第二部から第八部までは上記の標題のような生物学的生命と経済的生命の双方にとって重要な7つのテーマを検討している。大変興味深いものである。

バイオノミックスは生態経済学と翻訳されているが、著者は生態経済学は社会進化論を現代風にアレンジした人間社会生物学とは全く異なる点を強調している。社会進化論は進化の理論を人間の社会問題に適用しようとし、ナチスのユダヤ人大虐殺という人類史上

最大の悲劇をもたらしてしまった。そのような歴史的背景によって生物学が経済思想家にとってタブーになってしまった経緯があったが、現代生物学の知識を正しく使えば複雑な経済問題を解決できるかもしれない、残念な状況であると述べている。

人間社会生物学の提唱者たちは人間の文化の違いは、遺伝子の違いに由来すると考え、文化は精神によって形成されるのではなく遺伝子から生まれると考えているが、一方バイオノミックスは経済発展とそれに基づく社会的変化は、社会の遺伝子から生まれるのではなく、社会に蓄積された技術・知識によって形成されるという考え方である。このような経済的生命観の中核を成しているのは、人間ではなく技術だといっている。技術の進歩が浸透すると、かつては越え難いと思われていたカルチャー・ギャップもほとんど感じられないくらいになってしまう。ヨーロッパ統合などはその一例である。人間の歴史を通じて、文化を大きく変えたのは技術情報の進化であって、遺伝情報の進化ではなかった。